

学位論文の内容の要旨

専攻	社会環境病態医学	部門	環境医学
学籍番号	07D762	氏名	高橋 圭三
論文題目	Prevalence of attention deficit hyperactivity disorder and/or autism spectrum disorder and its relation to lifestyle in female college students		

(論文要旨)

目的

女子大生における注意欠陥多動性障害 (ADHD) 疑い、自閉症スペクトラム障害 (ASD) 疑いの有病率と、生活習慣との関連を検討する。

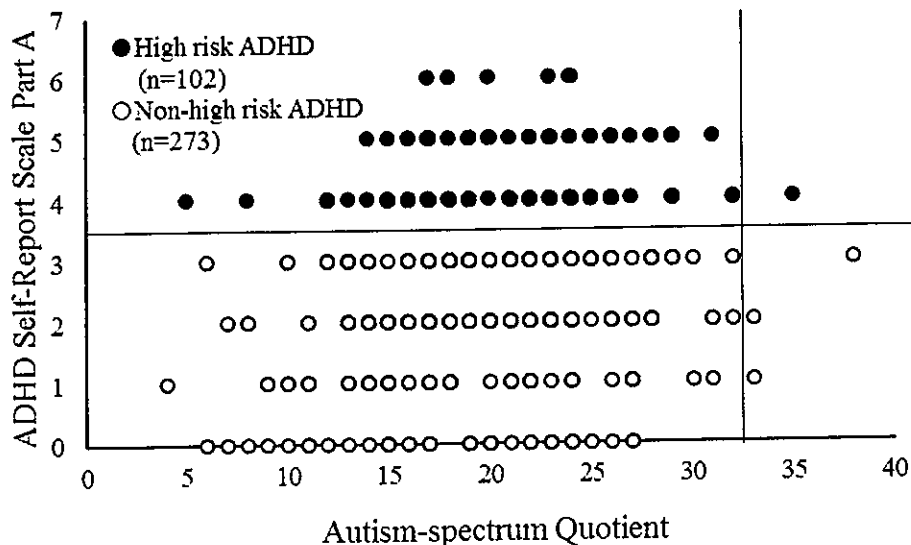
方法

調査は、A県B大学439人の女子大生に対して自記式アンケートを行い、有効回答数は、375名 (有効回答割合85.4%、平均年齢19.2歳±1.3歳) の回答を得た。調査項目は、ADHD自己報告尺度-v1.1 (ASRS-v1.1) を用いてADHD疑い、自閉症スペクトラム指数 (AQ) を用いてASD疑い、およびその重複割合を検討した。同時に、国民健康栄養調査の項目を参考にして、薬物の使用、運動習慣、喫煙習慣、飲酒習慣、睡眠の満足度等の生活習慣について調査し、ADHD疑いおよびASD疑いと生活習慣との関連を検討した。

結果

ADHD疑いのある被験者は102人 (27.2%)、ASD疑いのある被験者は4人 (1.1%) であった。ADHD疑いとASD疑いのある重複被験者は1人 (0.3%) のみであった。

ADHD疑いのある被験者のAQスコア (21.0±5.2) は、疑いのない被験者のAQスコア (19.3±5.6) に比較して有意に高値を示した ($p=0.007$)。ASD疑いのある被験者4名を除いたADHD疑いのある被験者とそうでない被験者の生活習慣に関しては明らかな差はなく、ADHD疑いのある被験者における生活習慣の有意な乱れは認められなかった。



考察とまとめ

今回の調査では、女子大学生において、自記式アンケートを用いてADHD疑いおよびASD疑いの有病率、さらにその重複割合を検討した。文部科学省から従来報告されているのは、医学診断としての調査ではなく、小中学校の担任によるものであり、2002年にはADHD、LD、ASDの疑いのある児童生徒を合わせて6.3% (内ADHDの疑い2.5%、ASDの疑い0.8%)、2012年は合わせて6.5% (内ADHDの疑い3.1%、ASDの疑い1.1%) と報告している。従来、ADHDは子ども特有の障害であると考えられていた。しかし、日本の調査で大人のADHDは子どもときのADHDの30~70%が継続し、18歳を過ぎて診断がなされた大人のADHDが63%であるとも報告されている。本調査では、女子大学生におけるADHD疑いの有病率が高かった。また、ADHDとASDの重複についてKoganは、米国で1.1%、Russellは英国で0.3%と報告しており、本調査でもほぼ同様の値であった。

ADHDは生活習慣が乱れやすく、生活習慣の乱れからADHDの発見の可能性が考えられるのではないかと考えられる。また、実際、ADHDにおける喫煙習慣、飲酒習慣、睡眠の質の問題さらにギャンブルの問題などが報告されている。しかしながら、今回の調査では明らかな生活習慣の乱れは認められなかったため、女子大生においては、生活習慣の乱れがADHDの発見の契機にはなりにくい可能性が示唆された。

本研究では、食習慣を調査していないこと、ひとつの大学の女子大生を対象にした横断調査であることなど多くの限界があるが、女子大生の中には潜在的なADHD疑いのある学生が存在しており、適切なスクリーニングを用いることにより、早期の介入が学校現場で可能になるのではないかと考えられた。

掲載誌名	Environmental Health and Preventive Medicine DOI 10.1007/s12199-016-0548-9		
(公表予定) 掲載年月	2016年6月27日	出版社(等)名	Springer Journal: Environmental Health and Preventive Medicine
Peer Review	有 ・ 無		

(備考) 論文要旨は、日本語で1,500字以内にまとめてください。